

5. その他の漁法で漁獲される魚介類

アサリ *Ruditapes philippinarum*

アサリは浅い干潟域に生息する二枚貝で、最もポピュラーな貝類の一つです。また、潮干狩りでとれることから、最も身近な海の資源といえます。

生物特性

アサリは水管を伸ばして海水を吸い込み、濾し取ったプランクトンを餌として成長します（写真1）。

浦ノ内湾では、アサリの産卵期は春（5～7月）と秋（10～12月）の2回ありますが、秋生まれ群の方が多いたことが分かっています（図1）。

産卵された卵（0.05～0.07mm）は約0.1mmの浮遊幼生になり、4～6m前後の水深で2～3週間程度海中を漂った後、約0.2mmの稚貝となって干潟域に着底します。

秋生まれの稚貝はその次の年の春までに殻長5～8mm、秋に14～17mmに成長し（図2）、1歳となります。成熟は15mm以上で、成長の早い個体は1歳から産卵します。

資源動向と県内の漁獲動向

アサリの漁獲量は、昭和50年（1975年）以降に急増し、昭和58年（1983年）に2,819トンで最大となりました（図3）。その後、漁獲量が大きく減少して、平成11年（2004年）以降50～150トン程度となり、24年以降は10トン以下にまで減少しています。

最盛期の高知県のアサリ漁獲量のほとんどは浦ノ内湾と宇佐周辺で、他の海域



写真1 水管を伸ばすアサリ

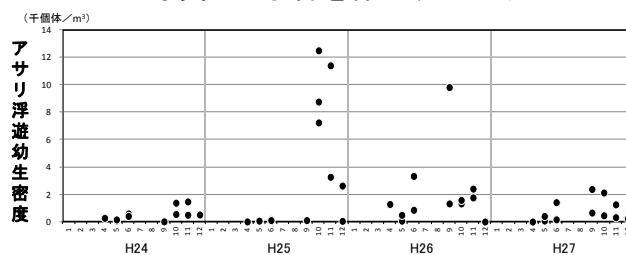


図1 アサリ浮遊幼生密度
(平成24～27年、浦ノ内湾-湾口域)

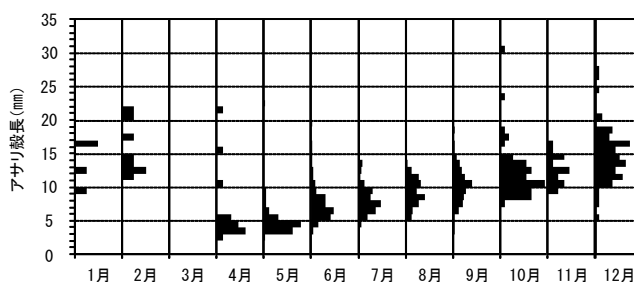


図2 アサリ殻長組成の推移
(平成17年、浦ノ内湾-天皇洲)

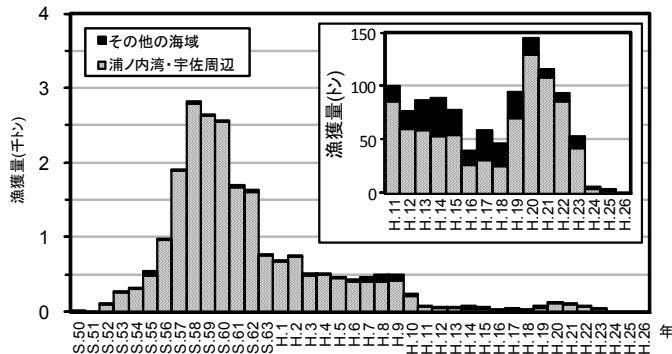


図3 高知県産アサリ漁獲量の推移
(昭和50～平成26年)

の漁獲量はごく僅かでした。しかし、過去の10年平均の地域別漁獲量では、土佐市が50トン、高知市が10トン、須崎市が3トンとなり、浦ノ内湾における著しい漁獲量の減少によって高知市の割合が増加しています。

漁獲量と水産試験場の調査結果から、高知県のアサリの資源水準は「低位」、動向は「減少」傾向と判断されます。

漁獲対象となる大型のアサリは、2回以上冬を越した個体（2歳前後以上）です。浦ノ内湾におけるアサリの主な生息水深は0～3mで、0m付近の密度が高くなり、5mより深い海域の密度は大きく低下します（図4）。ただし、底質が良好な場所では水深5mでも局所的に高密度で発生する場合があります。漁業者は「じょれん」と呼ばれる採貝具を用いて船の上から漁獲します。

近年、浦ノ内湾では、アサリの稚貝がある程度着底して成長を続けるものの、夏期以降に大量減耗して秋までにほぼ消滅してしまいます（図5）。

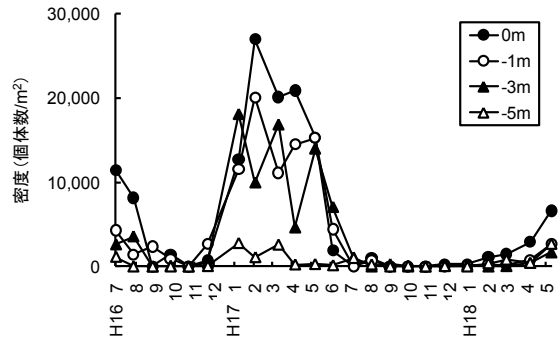


図4 アサリ稚貝の水深別生息密度分布（平成16～18年、浦ノ内湾）

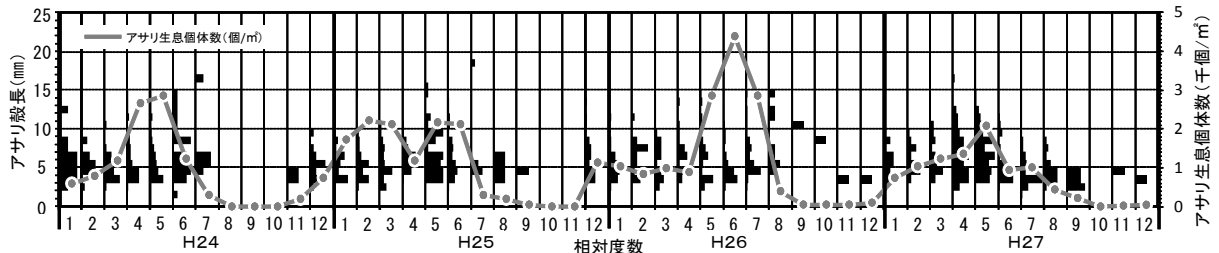


図5 アサリの生息個体数と殻長組成の推移（平成24～27年、浦ノ内湾-天皇洲）

アサリの減耗要因として、小型の二枚貝であるホトトギスガイのマット化やアオサの繁殖も一因と推定されますが、夏期以降の大量減耗の主要因は魚類やかに類による食害であることが明らかになってきました。

浦ノ内湾では、被せ網という方法でアサリの食害を防ぐことによってアサリを増やせることが証明されました。現在、漁業関係者と水産試験場が協力して、被せ網を設置してアサリを増やす取り組みを進めています（写真2）。



写真2 浦ノ内湾に設置された被せ網（平成27年、浦ノ内湾-天皇洲）